



Title	人生100年時代におけるアイデンティティ再考：評価・支援に求められる方法論的要件
Author(s)	志村，日出男
Citation	生老病死の行動科学. 2026, 30, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103991
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人生 100 年時代におけるアイデンティティ再考

—評価・支援に求められる方法論的要件—

Rethinking Identity in the Age of the 100-Year Life: Toward Methodological Requirements for Assessment and Support

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 志村 日出男¹

(University of Osaka, Graduate School of Human Sciences) Hideo Shimura

Abstract

This paper re-examines identity in the era of 100-year life as a dynamic process of reflexive self-formation in which meaning and practice are continuously renewed. It traces the theoretical lineage from Erikson's developmental framework through Marcia's operational definition to McAdams's narrative approach and Hermans' dialogical self theory, critically reviewing the achievements and limitations of prominent evaluative and practical methodologies. Building on this review, three core methodological requirements—temporal continuity, relational multiplicity, and reflective praxis—are identified as the foundation for assessment and support approaches needed today. The paper further discusses the applicability of this framework across clinical, educational, career development, and human capital management contexts, presenting a perspective to bridge theory and practice. Ultimately, this framework is positioned as a vital resource for individuals to navigate uncertainty and continuously reconstruct the self in contemporary society.

Keywords: identity, reflexive self-formation, narrative, dialogical self, lifespan development

はじめに

1. アイデンティティ再考の必要性

現代社会は、平均寿命の延伸から「人生 100 年時代」と呼ばれる局面に至り (Gratton & Scott, 2016) 医療技術や社会制度の発展から、個人が生涯にわたって多様な役割やキャリアを経験することが一般化している。その結果、従来は青年期に集中していた発達課題が、成人期や老年期においても再び顕在化し、自己のあり方を問い直す機会が増えている。こうした社会的背景の変化は、人が生涯にわたってどのように自己を再構築していくのかという課題を、改めて検討する契機と

なっており、単なる寿命の延長ではなく、人生の構造そのものを根底から変容させつつある。かつて標準的とされた「教育→就労→引退」という直線的な三段階モデルはもはや有効性を失い、生涯にわたる学び直しや複数回のキャリア転換を含む、多段階的で非線形なライフコースが一般化しつつある (内閣府, 2024; OECD, 2018)。

このような社会構造の変容は、個人に対しこれまで以上に主体的で柔軟な人生のデザインを要求し、一人ひとりが自らの将来を構想し直す不断の努力を迫る。安定した組織に帰属し、定められたキャリアパスを歩むという生き方が困難になる中で、個人は自らの人生を自律的に設計し、変化に適応し続ける能力が不可欠となっている。この長寿社会を生き抜くためには、経済的な有形資産だけでなく、知識や技能、人間関係、そして変化に適応し自己を再構築する力といった無形資産の蓄積が極めて重要となる (Gratton & Scott, 2016)。そして、このような長寿の時代において再考を求

¹ Correspondence concerning this article should be sent to; Hideo Shimura, Graduate School of Human Sciences, University of Osaka, Osaka, 565-0871 (u423542k@ecs.osaka-u.ac.jp)

められるのは、個と社会を取り結ぶ営みとしての「アイデンティティ」(Erikson, 1968)に関する理解である。アイデンティティとは、Erikson が提起した自我同一性の概念に基づき、個人が自己の一貫性と連続性を保ちながら、社会的役割や価値体系との関係を再構築していく過程を指す。すなわち、何者であり、どのように生きるかという自己認識の枠組みが、経験や文脈の変化に応じて更新される過程である。Marcia の枠組みに従えばこのプロセスは探索とコミットメントという次元から把握されるが、本稿では青年期に限らず、成人期や老年期においてもこの過程が持続し、個人がライフステージを通じて自己を定位し続ける現象として捉える (Marcia, 1966)。

2. 「再帰」を支える方法論的要請

人生 100 年時代の到来という人口の動態変化は、後期近代と呼ばれる社会状況と深く結びついている。Giddens (1991) が指摘するように、現代は伝統が自明の指針として機能しなくなった脱伝統社会である。このような社会では、個人のアイデンティティは、生まれや所属集団によって自動的に与えられるものではなく、個人が自らの行為の結果を絶えず省察し、意味づけ、編み直していく「自己の再帰的プロジェクト」となる (Giddens, 1990)。

ここでいう「再帰」とは、自らの社会的実践に関する新たな情報や知識が自己へと絶えず循環し、それに基づき自己理解と行動が更新されるプロセスを指す。この背景には、「個人化」(Beck & Beck-Gernsheim, 2002)、つまり伝統的な社会的枠組みや共同体の拘束が弱まり、個人が自らの人生の選択や意味づけを主体的に構築せざるを得ない状況や、「液化化する近代」(Bauman, 2000)、つまり、社会的価値や関係性が流動化し、安定したアイデンティティの保持が困難になる中で、個人は自己の生を意味づけ、再構成する主体となることを求められ続けるという今日の時代認識がある。社会的規範や役割の枠組みが不安定化する中で、個人は自己の生を意味づけ、再構成する主体となることを求められ、もはや青年期に一度確立したアイデンティティが生涯にわたって安泰をもたらすという時代ではない。むしろ人生の各段階で転機や選択に直面するたびに、自己を問い直し、再定義していくプロセスそのものが、現代におけるアイデンティティの本質となる。

こうした時代に求められるものは、固定的・静

的な自己像の測定ではなく、自分の行為や経験を省察し、それをもとに自己のあり方を更新するプロセスとなる「再帰的自己形成」を支援する方法論であると言えよう。

3. アイデンティティ評価・支援のパラダイム

再帰的な自己形成は、個人に能動的な自己構築の契機を与える一方で、絶え間ない選択と自己責任の要請が、不安や意味喪失といった心理的課題を引き起こす可能性も伴う (Giddens, 1991)。したがって、個人が人生の転機を乗り越え、心理的ウェルビーイングを維持するには、自己のアイデンティティの現状を把握し、将来像を構想するための評価・支援の枠組みが不可欠である (岡本, 1999)。これは、臨床心理学や生涯発達支援、キャリアカウンセリングといった実践領域における喫緊の課題でもあるといえる。さらに、この要請はビジネス領域、特に今日の人的資本経営においても極めて重要である。知識経済が深化する現代において、従業員の能力や経験だけでなく、そのアイデンティティ、すなわち仕事に対する意味づけ、動機、キャリア展望といった内面的な要素こそが、組織の競争力を左右する中核的な人的資本となる (窪山・本田, 2024)。また、従業員が自らのアイデンティティと組織のビジョンを整合的に結び付けられない、あるいはキャリアの移行期に自己を見失ってしまう場合、組織との一体感や仕事への意欲の高さなど、心理的な関与の度合いであるエンゲージメントの低下や離職につながり、組織にとって大きな損失となる (正木・岡田, 2010)。そして、従来の画一的な人材評価や、静的なパーソナリティ検査では、従業員の動的なアイデンティティ変容プロセスを十分に捉えられず、個人の成長支援や組織全体の適応促進における方法論的な限界が明らかになっている (堀内・岡田, 2009; 正木, 2021)。こうしたことから、個人のアイデンティティの多様性と動態性を可視化し、職場やコミュニティなど、他者との相互理解を支える対話を促す方法論は、今日社会において不可欠の要件であると言えよう。

以上の背景を踏まえ、本稿は人生 100 年時代という新たな社会的文脈において、アイデンティティ概念を理論的に再検討し、その評価および支援の実践枠組みの革新に向けた展望を示すことを目的とする。

具体的には、エリクソンに始まるアイデンティ

ティ研究の系譜を手がかりとして、ステイタス・パラダイムから動的なプロセス論への展開を辿り、さらにナラティブ・アプローチおよび対話的自己論へと至る理論的・方法論的変遷を概観する。続いて、これまでに提示されてきた代表的なアイデンティティの評価および支援の方法論を取り上げ、それぞれの理論的貢献を踏まえつつも、現代社会の要請に十分応答しきれていない点を明らかにする。

これらの批判的検討を通して、本稿は、今後のアイデンティティの評価および支援に求められる要件として、過去・現在・未来の連続性に着目する時間的観点、自他の相互作用を捉える関係的観点、ならびに認識と実践の往還を重視する循環的観点の三点を提示する。

以上の検討を基盤として、本稿は、これらの観点を統合した方法論的枠組みの構築方向を示し、今後の研究および実践の発展に資するものを目指す。

アイデンティティ研究の系譜

アイデンティティ概念は、心理学において長らく探求されてきたが、その捉え方は時代とともに拡張と深化を続けてきた。本章では、その理論的変遷を、固定的・類型的なステイタスとしての理解から、時間的・統合的な物語へ、そして多元的であり関係的な対話へと至る系譜として整理する。

1. 基礎理論から測定法の確立へ

アイデンティティ研究の礎を築いた Erikson (1968) は、心理社会的発達理論で青年期における中心的な発達課題を「自我同一性の確立 対 役割拡散」と位置づけ、「自分は何者か」という問いに対する内的一貫性と連続性の感覚、そして社会の中で他者から承認されているという感覚の統合が重要であると説いた。このエリクソンの理論を実証的研究の俎上に載せた Marcia (1966) は、個人が自らの価値観や役割、将来の方向性について深く検討し、再選択を迫られる発達の転機を指す「危機」、あるいは自己や社会の中での役割や価値、将来の可能性について選択肢を模索し検討する過程である「探索」と、自分の価値観や役割に対して主体的に関わる姿勢である「コミットメント」という2つの次元を操作的に定義し、その有無の組み合わせから、青年期のアイデンティティ状態を4つのステイタスに分類した。すなわち、

探索を経て主体的にコミットメントを形成した「アイデンティティ達成」、価値観や進路を探索中で決定を保留している状態の「モラトリアム」、探索を経ずに他者の価値観を受け入れた「早期完了」、そして探索もコミットメントも欠如した「アイデンティティ拡散」である。このステイタス・パラダイムは、アイデンティティという複雑な概念を測定可能なものとし、その後の膨大な実証研究の基礎を築いたものであった。

2. ステイタスからプロセスへ

Marcia のモデルは青年期研究に絶大な影響を与えたが、その後の研究は、アイデンティティの発達が青年期で完結するものではないことを明らかにしてきた。Baltes (1987) に代表される生涯発達心理学の視点は、人間の発達が生涯にわたる獲得と喪失のダイナミクスであり、成人期以降も変化と適応が続くプロセスであることを強調した。この視点を裏付けるように、縦断研究からは、成人期においてアイデンティティの再構築が繰り返し起こることが示されている。特に一度「モラトリアム (Moratorium)」から「達成 (Achievement)」に至った個人が、キャリアの転機やライフイベントを機に再び「モラトリアム」に戻り、新たなコミットメントによって再び「達成」という「MAMA サイクル」の存在が確認されている (Stephen et al. 1992)。

この発見は、アイデンティティを固定的な「ステイタス」ではなく、生涯を通じて変化しうる動的な「プロセス」として捉える必要性を示唆した。近年では、ステイタス・パラダイムの限界を乗り越えるべく、より精緻なプロセスモデルが提案されている。Crocetti et al. (2008) の三次元モデルは、Marcia のステイタス・パラダイムを拡張し、コミットメントを維持・強化する過程と再検討・再構成する過程に分けて捉えることで、アイデンティティ形成の質的差異を明らかにした。一方で Luyckx et al. (2008) によるデュアルサイクルモデルは、これら二つの探索過程を統合的に捉え、探索の拡張からコミットメントを形成する「形成サイクル」と、探索の深化を通じて既存のコミットメントを同一化する「評価サイクル」を提示した。これによりアイデンティティの発達過程を、形成と再評価が循環する動的プロセスとして理論化している。これらの研究動向は、アイデンティティ理解が静的な類型論から、動的なプロセス論へ

と移行しつつあることを明示している。

3. ナラティブ・ターン～自己を物語るプロセス

時代認識としての「ナラティブ・ターン」、すなわち出来事を時間的連関の中で、当事者が意味づけて語るという思考様式の転換（サトウ、2018）を背景に、McAdams（1993）は、アイデンティティを「個人が自らの生を内的に構築し、語り続けるライフストーリー」と捉えた。そのナラティブ・アイデンティティ論、つまり人生経験を一貫した物語として意味づけ自己を物語ることを通じて理解する理論は、人は断片的な人生経験を時間的な因果関係やテーマ性を持つ一貫した物語として統合することで、自己に意味と目的、そして連続性を与えると捉える。そしてパーソナリティを、気質的特性（社会的アクター）、動機や価値観（動機づけられたエージェント）、そしてライフストーリー（自伝的著者）という三層構造で捉え、ライフストーリーこそが個人を統合する最も高次の層であるとした（McAdams & Pals, 2006）。

このアプローチの核心は、アイデンティティを人が「持つ」静的な属性ではなく、人が「為す」能動的な意味構築のプロセスとして捉える点にある。特に、困難や苦悩といったネガティブな経験を、いかに物語の中で意味づけるかが心理的成熟とウェルビーイングに深く関わるとされる。例えば、悪い出来事が結果的に良い学びや成長につながったと語るといった、否定的な出来事の語り直しを指すリデンプション・シークエンスを多く語る人は精神的健康度が高い傾向がある。逆に、良かったはずの出来事が悪い結果に終わったと語ること、すなわちコンタミネーション・シークエンスは、低いウェルビーイングと関連する（McAdams & McLean, 2013）。ナラティブの視点は、アイデンティティを「何であるか（what）」という問いから、「いかにして自己を物語るか（how）」という問いへのシフトによって質的な深みをもたらした。

4. ダイアロジカル・ターン～多元的な自己対話

近年、自己を単一の存在としてではなく、多様な声を有する存在とみなし、それらが内なる対話を通じて交渉するプロセスとして見る「ダイアロジカル・ターン」が注目を集めてきた。この趨勢の中で、最も現代的なアイデンティティ理論の展開として、Hermans（2001）の「対話的自己論

（Dialogical Self Theory: 以下、DST とする）」が挙げられる。DST は、自己を単一で統合された統一体としてではなく、多様な「I-ポジション」が対話し、交渉しあうミクロな社会として捉える。I-ポジションとは、「学生としての私」「リーダーとしての私」「不安に思う私」といった内的な自己の側面だけでなく、「私を励ます父の声」「私を批判する社会の目」「私が憧れる未来の自己像」といった、他者や社会、想像上の存在をも含む、多様な「声」の主体である（Hermans & Hermans-Konopka, 2010）。

この理論の画期的な点は、現代人が経験する自己の多元性や内的葛藤を、病理ではなく自己の豊かさとして捉え直す視座を示したことにある（Hermans & Dimaggio, 2007）。古典的なアイデンティティ理論が単一で首尾一貫した自己を理想とするのに対し、ポストモダン思想では統一的自己像への懐疑から断片化が強調され、両者はしばしば対立的に語られてきた。DST は、この二項対立を乗り越える（Hermans & Kempen, 1993）。DST において「統一性」や「一貫性」とは、多様な I-ポジションが存在しない状態ではなく、それらの声が生産的な「対話」を交わし、一時的な合意や調和を生み出している状態を指す。逆に「断片化」や「拡散」とは、対話が断絶し、あるポジションが他のポジションを抑圧したり、声同士が不毛な対立を続けたりしている状態を意味する（Hermans, 2001）。したがって、アイデンティティの発達とは、自己の内部にある多様な声を認識し、それらの間の対話関係をより豊かで柔軟なものにしていくプロセスと捉えることができる（Hermans, 2013）。この DST の視点は、複雑で矛盾に満ちた現代人の自己を理解し、評価する上で極めて強力な理論的枠組みを提供するものである。

なお本稿では、このダイアロジカル・ターンとナラティブ・アプローチを対立的ではなく相補的に位置づける。ナラティブ・アプローチが語りの時間的構成を通して個人の「一貫性」を描くのに対し、ダイアロジカル・ターンは、その語りが複数の声や立場の交錯の中で生成されることを示す。つまり両者を統合的に捉えることで、自己を「語る自己」と「対話する自己」の相互作用と位置付けるものである。

方法論の成果と課題

これまで概観したアイデンティティ理論の展開に伴い、その評価・測定手法も多様な発展を遂げてきた。一方で、人生 100 年時代の再帰的な自己を捉える視点からは、これらの既存のアプローチにはなお一定の課題が残されている。本節では、主要な評価法を取り上げ、その到達点と課題を整理する。

1. 質問紙法的方法的制約

アイデンティティ測定において広く用いられてきたのが、自己記入式の質問紙法である。Erikson の心理社会的発達理論に基づく感覚を測定する尺度 (Rasmussen, 1964; Rosenthal et al., 1981) や、Marcia のステイタス・パラダイムに基づいて開発された同一性地位尺度 (加藤, 1983) , EOM-EIS (Bennion & Adams, 1986) , Berzonsky (1989) のアイデンティティ・スタイル尺度 (ISI) など、多様な尺度が開発されてきた。これらの手法は、アイデンティティの構成概念を数量的に把握することを可能にし、大規模調査や集団比較を通じて、アイデンティティと他の心理的変数との関連を統計的に検証する研究の発展に寄与してきた。標準化された尺度を用いることで、信頼性や再現性の高い量的測定が可能となり、実証的研究の蓄積を支える基盤の手法として位置づけられる。

しかし、その利便性の背後にはいくつかの方法的制約が指摘されている。第一に、自己報告形式への依存である。回答は自己認識の正確性や社会的望ましさの影響を受けやすく、内的状態をそのまま反映しているとは限らない (Meeus, 2011) 。第二に、質問紙法は特定の時点における状態を捉える測定であり、アイデンティティ形成の過程の変化や揺らぎを動的に把握することが困難である (Ibarra, 2003) 。第三に、探索やコミットメントといった多義的な心理過程を、項目への評定値に還元せざるをえず、個人の経験や意味づけの文脈的な豊かさを十分に捉えきれない点が挙げられる (山崎・内田, 2015) 。さらに第四に、項目化の前提に依存するため、文化的・社会的多様性や他者との関係性が十分に反映されにくく、アイデンティティを相対的に固定的な構造として扱う傾向がある (Erikson, 1968) 。

2. Marcia の面接法の意義と方法的限界

Marcia (1966) が当初用いた半構造化面接法は、質問紙法に比して、個人の語りに即した詳細な質的情報を得られる点に特徴がある。面接者が探索の動機やコミットメントの内容を文脈的に評価することにより、アイデンティティの構造や意味生成の過程をより妥当的に把握できると期待された (Hermans, 2001) 。この方法は、構造化された項目への回答に限定されない柔軟性を有し、個人の語りを通して発達の連続性や個人差を質的に描出できる点で、質問紙法の静的・量的な制約を補完する形で発展してきた。

しかし、このアプローチにもいくつかの方法的限界が指摘されている。第一に、発達の連続的な過程を、離散的かつ相互排他的なカテゴリーへと分類する点である。現実には、複数の領域 (例：職業、恋愛、思想) において異なるステイタスが併存したり、時間の経過とともに移行したりする個人を、単一のラベルで代表させることには限界がある (谷, 2001; Kroger et al., 2010) 。第二に、本モデルは青年期の発達課題を前提として構築されており、成人期以降に生じるキャリア転換や家族役割の変化に伴うアイデンティティ再定義といった複雑なプロセスを十分に捉えきれない (Baltes, 1987; Kroger, 2007) 。さらに、面接者や分析者の技能や主観に評価が左右されやすく、信頼性・妥当性の確保が困難である点や、調査に要する時間と労力の大きさから、大規模研究への適用に制約がある点も課題として挙げられる (Raskin, 1984; Côté & Levine, 1988) 。このように、面接法は動的な意味生成を捉える重要な進展をもたらした一方で、測定の客観性や適用範囲の拡張という点では課題を残している。

3. ナラティブの意義と適用的課題

ナラティブ・アプローチ、とりわけ McAdams (1993) のライフストーリー・インタビューは、個人の語りを通じて人生の意味づけを探る質的研究法として、既存の測定アプローチの限界を補完する可能性を示してきた。この方法は、Marcia の面接法と同様に語りを重視する点で共通するが、探索やコミットメントといった構造的側面の分類に焦点を当てるのではなく、個人の経験や価値が人生物語として統合されていく過程そのものに注目する点に特徴がある。語りを直接分析す

ることで、アイデンティティを固定的な特性ではなく、意味を生成し続ける動的なプロセスとして捉えることが可能となり、過去・現在・未来をつなぐ時間的連続性や、個人に固有の人生テーマといった側面を描き出すことができる (Phinney, 1992)。また、人生物語に含まれる主題や因果的連関が、心理的適応や精神的健康と関連することも示されている (McAdams & McLean, 2013)。

しかし、ナラティブ・アプローチを評価法として用いる場合、いくつかの課題も指摘されている。第一に、分析の主観性と信頼性の問題である。語りの解釈は研究者の判断に依存する部分が大きく、テーマの抽出やリデンパション・シークエンスの同定などのコーディングには高度な訓練が求められるため、研究者間の一致率を十分に確保することは容易ではない (McLean & Syed, 2015)。第二に、実用性の制約が挙げられる。膨大な語りデータの収集と分析には多大な時間と労力を要し、大規模集団への適用や、臨床・教育・産業場面において迅速なフィードバックが求められる状況で広く用いることには限界がある (Shamir & Eilam, 2005)。第三に、語りの文脈依存性の問題である。語りは聞き手や語りの場との相互作用のなかで形成される「共同構築物」であり (Pasupathi, 2001)、それを内的自己像の直接的な反映として解釈する際には慎重な検討が必要となる。

4. 対話的自己論的方法的含意

従来の質問紙法や面接法、ナラティブ・アプローチは、それぞれに重要な成果を挙げてきた一方で、自己の多元性そのものを分析単位として扱う点では限界を残していた。質問紙法は測定客観性や比較可能性を確保できる反面、自己内に併存する複数の立場や文脈依存的な変化を捉えにくい。また、面接法やナラティブ・アプローチは語りの質的深さを引き出す点で有効であるが、語りを構成する背後の複数の声や立場の相互作用を理論的に分析する枠組みは必ずしも明確ではなかった。

これに対して DST は、自己を単一の主体としてではなく、複数の「声」や位置が相互に応答しあう多声的存在として捉え、自己内外の対話過程を理論的に可視化しようとする枠組みである。すなわち、個人の語りを固定的な表現としてではなく、異なる位置や関係のあいだで生成される意味の動態として分析可能にする点に、DST の方法

論的独自性がある。

もつとも、DST は実証的基盤の整備という課題を残している。内的対話と社会的文脈との連関を測定・検証する手法は十分に確立されておらず (Jasper et al., 2012)、また主観的解釈への依存や、自己の統合的理解が相対的に弱まる可能性も指摘されている (Suszek, 2017)。この点で、DST は完成された測定法というよりも、今後の理論的・方法論的發展に向けた生成的枠組みとして位置づけることが妥当である。

そのうえで注目すべきは、DST が自己を時間・関係・行為の相互生成過程として捉えようとする点である。すなわち、自己は一貫した物語として静的に統合されるものではなく、複数の声が交錯する対話のプロセスのなかで意味を生成し続ける存在として理解される。この視点は、自己を固定的属性ではなく、生成と再構成の過程として捉える理論的基盤を提供する。

グローバル化やデジタル化の進展、多様な価値観や文脈が重なり合う現代社会において、個人は自己の在り方を不断に問い直し、再帰的に意味づけを更新することを要請されている。DST が示す時間性・関係性・循環性の三側面は、このような自己再帰の要請に応答する方法論的要件として位置づけられる。時間性は過去・現在・未来を往還しながら自己を再構成する働きを、関係性は他者や集団との相互対話を通じて自己を生成する働きを、循環性は理解と行為の相互作用によって自己を更新する働きを指し示している。

実際、キャリア移行やスポーツ引退の研究では、時間的再統合が自己更新の契機となることが示されており (Hlasová et al., 2024; García-Morante et al., 2025)、教師の専門職研究では関係的文脈が専門的自己像の変容を促すことが報告されている (Monereo & Badia, 2020)。また臨床実践においても、語りと行為の循環が新たな意味づけを生むことが明らかにされている (Mellado et al., 2024)。これらの知見は、DST が自己再帰が要請される今日において、アイデンティティの理解と支援を結ぶ方法論的基盤として機能しうることを示唆している。

5. 既存方法論の総括と発展的課題

質問紙法、面接法、ナラティブ・アプローチはいずれも、アイデンティティを理解するための重要な知見を積み上げてきた (Table 1)。質問紙法は

Table 1

主要なアイデンティティ研究方法論の特徴

方法論	主な理論的基盤・代表例	利点	課題
質問紙法	・ Ego Identity Scale (Rasmussen, 1964) ・ 同一性地位尺度 (加藤, 1983) ・ EOM-EIS (Bennion & Adams, 1986)	・ 標準化された尺度により、信頼性・再現性の高い量的測定ができる ・ 大規模調査や集団比較を通じて、他の心理的変数との関連を検討できる	・ 自己報告に依存し、内的状態を十分に反映しない可能性がある ・ 特定時点の状態を捉えるにとどまり、形成過程や時間的変化を把握しにくい
面接法 (Marcia)	・ Identity Status Interview (Marcia, 1966)	・ 語りを通して探索やコミットメントを文脈的に把握できる ・ 発達連続性や個人差を質的に描出できる	・ 連続的な発達過程をカテゴリー化する限界がある ・ 青年期を前提とした枠組みであり、成人期以降の変容を捉えにくい
ナラティブ・アプローチ	・ ライフストーリー・インタビュー (McAdams, 1993)	・ 過去・現在・未来をつなぐ意味づけの過程を捉えられる ・ アイデンティティを動的なプロセスとして理解できる	・ 解釈の主観性が高く、信頼性・再現性の確保が難しい ・ データ収集・分析に時間とコストを要する
対話的自己論モデル	・ Dialogical Self Theory (Hermans, 2001)	・ 自己を多声的・関係のプロセスとして捉えられる ・ 時間性・関係性・循環性を統合的に理解できる	・ 測定・分析手法が発展途上で、実証的検証が限定的である ・ 理論的豊かさに比して操作的定義が十分でない

標準化と比較可能性を担保し (Luyckx et al., 2008), 面接法は当事者の語りから豊かな理解を導き (Meeus, 2011), ナラティブ・アプローチは物語の整合性と連続性を照射してきた (McAdams & McLean, 2013)。これらの手法は、いずれも個人の内的整合性を重視し、自己を一貫した主体として理解するという点で共通している。

しかし、この枠組みでは、過去の経験と現在の自己理解、そして未来への展望が相互に影響し合う時間的な連続性を十分に捉えきれず、また、個人の内的多声性と他者・社会的文脈との相互作用、さらには理解と行為の循環のプロセスを扱う枠組みが十分に整っているとは言えない。

一方、近年の研究を俯瞰すると、こうした限界を補う方向性として、多様な声の共存を探る視点、時間の連続性を再構成する試み、語りと実践の循環を支える手法が徐々に見え始めている (石井, 2016; 藤野, 2022; Savickas et al., 2009)。こうした動向は、自己を多声的かつ生成的に捉える趣意のアプローチへの移行を示している。以下、これらの要素を整理し、今日のアイデンティティ

研究における方法論的要件を具体的に論じていく。

今日求められる方法論的要件

前節までの検討から、アイデンティティを統合的で一貫性あるものとして捉える視点から、対話的な生成過程としての自己を捉える視点が必要であることが明らかとなった。人生 100 年時代におけるアイデンティティ研究においては、変化する環境や多様な関係の中で、自己を再帰的に形成し続けるプロセスを理論的に支える枠組みが求められている。これを踏まえ、本稿では、再帰的自己形成を支える方法論的要件として、時間性・関係性・循環性の三つの次元に焦点を定め、それぞれの理論的・実践的意義を検討する。

これら三要素は、前節で論じた、生成的で対話的自己観を具体化するものであり、同時に、複数の理論系譜に共通して見られる構造的基軸でもある。すなわち、発達心理学における生涯発達の視座 (Baltes, 1987) は時間的連続性を、社会心理学における対人的・社会的相互作用モデル (Giddens,

1991; Hermans, 2001) は関係の多元性を、キャリア心理学における自己と環境の適応循環モデル (Savickas et al., 2009) は認識と行為の循環をそれぞれ中核としており、この三つの次元が重なり合うところに、現代のアイデンティティ研究が依拠すべき方法論的基盤が見いだされる。

したがって以下、各要件に関して、今日の文脈における理論的・実践的意義を検討する。第一に「時間的な連続性」は、過去・現在・未来を一つの物語として再構成し、人生の意味づけを維持するための時間的統合の枠組みである (Habermas & Bluck, 2000; Ibarra, 2003; McAdams & McLean, 2013)。第二に「関係の多元性」は、個人が内的に抱く多様な自己像や、他者・社会の視点を資源として取り込み、相互作用の中で自己理解を拡張するための視座である (木谷・岡本, 2018; Monereo & Badia, 2020; Hermans, 2001)。第三に「知行の循環」は、語りによる理解と行為による経験が相互に影響し合う、認知と実践の循環的過程を指す (Savickas et al., 2009; 松見, 2016; Mellado et al., 2024)。

1. 時間的な連続性

アイデンティティは、過去・現在・未来を断片的に並べるのではなく、往還的に結び直す営みとなる。Habermas & Bluck (2000) は、自伝的推論を通じて個人が出来事を時間軸上で位置づけ、自己の一貫性を再構築することを明らかにした。また Ibarra (2003) は、キャリア転換の過程を分析し、新たな職業的自己像が「過去の再解釈」と「未来の可能性」の間を往還する試行的行為から生まれることを示した。さらに McLean et al. (2007) は、青年期のライフストーリーにおいて、ネガティブな出来事を語り直し、成長や学びとして未来に結びつけるプロセスが精神的健康に関連することを示している。これらの研究は、アイデンティティを「現在の点」で切り取るのではなく、「時間的連続性」の中で把握する必要性を裏づけている。過去の再解釈、現在の柔軟な意味づけ、未来への展望を編み直すことが、再帰的自己形成を支える方法論に不可欠と考えられる。

2. 多元的な関係性

自己は多声的であり、ときに矛盾をはらむ複数の側面を持つ。Hermans (2001) は I-ポジションの概念を提起し、Grimell (2017) は移行期におけ

る自己対話が自己理解を深めることを示した。藤野 (2021, 2022) は国内調査において、多元的自己群の若者がむしろ高いアイデンティティ感覚を持つ場合があることを報告し、木谷・岡本 (2018) は複数の自己像を同時に「本当の自分」として受容できる若者の存在を示した。

また教育領域では、Monereo & Badia (2020) が教師の専門職アイデンティティ研究において、個人の I-ポジションだけでなく集合的な「We-ポジション」の変容が重要であると指摘した。さらに臨床領域では、Mellado et al. (2024) の系統的レビューが、クライアントの多様な声を受容し資源化することが心理的変容を促すとまとめている。これらは、多元性を「統一されないがゆえの弱点」としてではなく、「相互関係を築き直すための資源」として扱うことの重要性を示している。

3. 知行の循環性

理解と行為の関係は、単線的ではなく循環するプロセスとして理解されるべきである。Adler (2012) は、心理療法を通してクライアントが語り方 (理解) を変えていくプロセスが先行して心理的健康 (行為) へと変化をもたらすことを、縦断的に確認した。つまり、内省的な語りが行為への布石となる循環の存在を示している。

また、Waters & Fivush (2013) は、自己の物語の「一貫性」が心理的調整を支えることを明らかにし、一貫したナラティブが自己理解を行動力へとつなげる橋渡しとなっている。この関係性は、物語を編むプロセスが自己への理解を深化させるとともに、行動の選択にも影響する構図を裏づけるものである。またナラティブ・アイデンティティの概念は、過去の出来事・現在の自己・未来に対する見通しを一体として理解する枠組みを提供し、それが実際の行動や生活の意味づけに直結する特性を強調している。これらの知見は、自己理解が具体的な行為へと導き、行為が新たな理解を育み返す循環を支える方法論の重要性を示している。

結論と課題

本稿は人生 100 年時代におけるアイデンティティを、固定的な達成や静的な属性ではなく、「再帰的自己形成」の動的プロセスとして捉え直す必要性を示した。Erikson (1968) に始まる理論的系譜は、Marcia (1966) による測定的定義、McAdams

(1993)のナラティブ・アプローチ,Hermans(2001)のDSTへと展開してきた。その過程で、自己理解は「一貫した像」の追求から、「時間の中で編み直される物語」と「多元的な声の対話」へと深化してきたことが確認された。

評価・測定の方法論もまた、質問紙・面接・ナラティブという異なる系譜が、それぞれ固有の強みをもたらした。質問紙法は大規模調査の基盤を築き、面接法は文脈に根差した解釈を可能にし、ナラティブ法は意味生成と省察の動態を捉える新たな地平を開いた。しかし同時に、それぞれの方法は、横断的スナップショットに偏りやすいこと、自己報告に依拠しやすいこと、変容プロセスを継続的に追跡しにくいことなどの課題を内包している。これらは価値を損なうものではないが、現代的要請に応えるには補完が必要である。

本稿の議論を総合すると、今後の発展課題は次の三つに収斂する。第一に「時間的な連続性の獲得」である。アイデンティティは一時点で切り取るのではなく、過去・現在・未来を往還的に編み直す営みとして捉える必要がある。第二に「多元的な作用の理解と受容」である。自己の複数の声を矛盾や断片ではなく、資源として可視化し承認する支援が求められる。第三に「知行の循環によるアイデンティティの形成」である。「自分とは何者であるか」といった自己様式であるBeingの捉え直しや自覚の深化にとどまることなく、そのあり方の変容を行為としてのDoingによる環境との相互作用の中で検証し、さらなる自己変容への循環を叶えるといった、実践的支援の枠組みが必要である。

これらの課題は理論的枠組みにとどまらず、実践領域においても応用可能な視座を提供するものである。第一に、臨床領域においては、クライアントが自己物語を語り直す過程で、異なる「声」や「立場」を対話的に扱うことが、自己統合と再構成を促す介入原理として有効である(Hermans & Hermans - Konopka, 2010; McAdams, 2013)。第二に、教育領域では、学習者が自己理解を深め、将来像を語り直すプロセスの中に、時間的、関係的視点を導入することで、キャリア発達やアイデンティティ形成の支援が理論的に裏づけられる(Savickas et al., 2009; 木谷・岡本, 2018)。第三に、キャリア支援および人的資本経営の実践では、組織内の個人が自らの経験を物語化し、多様な立場の間で意味づけを再構築することが、主体的な学習と関係的リーダーシップの循環を促す基盤となる(Ibarra, 2003; Gratton &

Scott, 2016)。

このように、方法論的要件は、個人の内的発達を説明する理論的構造であると同時に、組織・教育・臨床といった実践領域において機能しうることから、今後はこれらの要件を理論と実践の循環構造として精緻化し、異なる領域間での応用可能性を検証することが課題である。

人々が長いライフコースを生き抜く過程で、転機を乗り越え、内的多様性を資源として活かしながら自己を再創造するための枠組みとして、本稿の展望は理論と実践を結ぶ足場となり得る。今後は、縦断的研究による時間的連続性の把握、また他者や自分の中に存在する多様な視点を含む多元的な立場の理解、そして知行を両輪とする実践モデルの構築を進めることが不可欠となるが、それらの要件と、かつ学術的厳密性と現場での有効性を併せ持つ方法論を確立することにより、人生100年時代を生きる人々のウェルビーイング向上に資することが期待される。

引用文献

- Adler, J. M. (2012). Living into the story: Agency and coherence in a longitudinal study of narrative identity development and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102(2), 367–389. <https://doi.org/10.1037/a0029359>
- Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23(5), 611–626. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.23.5.611>
- Bauman, Z. (2000). *Liquid modernity*. Polity Press.
- Beck, U., & Beck-Gernsheim, E. (2002). *Individualization: Institutionalized individualism and its social and political consequences*. Sage.
- Bennion, L. D., & Adams, G. R. (1986). The Extended Objective Measure of Ego Identity Status: A reference manual. *Journal of Adolescent Research*, 1, 183–197. <https://doi.org/10.1177/074355488612005>
- Berzonsky, M. D. (1989). Identity style: Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescent Research*, 4(3), 268–282. <https://doi.org/10.1177/074355488943002>
- Côté, J. E., & Levine, C. (1988). A critical examination of the ego identity status paradigm. *Developmental Review*, 8(2), 147–184. [https://doi.org/10.1016/0273-2297\(88\)90002-0](https://doi.org/10.1016/0273-2297(88)90002-0)
- Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008). Capturing the dynamics of identity formation in late adolescence: The process of identity development in a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, 31(2), 207–222. <https://doi.org/10.1016/j.adolescence.2007.12.002>

- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. W. W. Norton & Company.
- 藤野 遼平 (2021). 後期近代における自己の多元化の傾向とアイデンティティ理論に関する動向と展望. 大阪大学教育学年報, 26, 51-62.
- 藤野 遼平 (2022). 現代青年における自己の多元性とアイデンティティの関連. 青年心理学研究, 33, 87-104. https://doi.org/10.20688/jsyap.33.2_87
- García-Morante, M., Castelló, M., & Monereo, C. (2025). Hybrid identities in doctoral graduates' career transitions. *Higher Education Research & Development*. <https://doi.org/10.1080/07294360.2025.2526076>
- Giddens, A. (1990). *The consequences of modernity*. Polity.
- Giddens, A. (1991). *Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age*. Stanford University Press.
- Gratton, L., & Scott, A. (2016). *The 100-year life: Living and working in an age of longevity*. Bloomsbury.
- Grimell, J. (2017). Advancing an understanding of selves in transition: I-positions as an analytical tool. *Culture & Psychology*, 23, 1-22. <https://doi.org/10.1177/1354067X17707451>
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Developmental Psychology*, 36(6), 701-713. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.36.6.701>
- Hermans, H. J. M. (2001). The dialogical self: Toward a theory of personal and cultural positioning. *Culture & Psychology*, 7(3), 243-281. <https://doi.org/10.1177/1354067X0173001>
- Hermans, H. J. M. (2013). The dialogical self in a global and digital age: Development, learning, and therapy. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9781139565196>
- Hermans, H. J. M., & Dimaggio, G. (2007). Self, identity, and globalization in times of uncertainty: A dialogical analysis. *Review of General Psychology*, 11(1), 31-61. <https://doi.org/10.1037/1089-2680.11.1.31>
- Hermans, H. J. M., & Hermans-Konopka, A. (2010). *Dialogical Self Theory: Positioning and counter-positioning in a globalizing society*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511712142>
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. Academic Press.
- Hlasová, H., Pauha, T., & Ronkainen, N. (2024). A dialogical self approach to self-innovation and narrative continuity in retirement from elite sport. *Journal of Constructivist Psychology*. <https://doi.org/10.1080/10720537.2024.2412851>
- 堀内 泰利・岡田 昌毅 (2009). キャリア自律が組織コミットメントに与える影響. 産業・組織心理学研究, 23(1), 15-28. https://doi.org/10.32222/jaiop.23.1_15
- Ibarra, H. (2003). Working identity: *Unconventional strategies for reinventing your career*. Harvard Business School Press.
- 石井 僚 (2016). 時間的展望とアイデンティティ形成との関連：形成プロセスとプロダクトの両側面からの検討. 発達心理学研究, 27(3), 189-200. https://doi.org/10.11201/jjdp.27.3_189
- Jasper, D., Moore, N., Whittaker, C., & Gillespie, A. (2012). Methodological approaches to studying the self in its social context. In H. J. M. Hermans & T. Gieser (Eds.), *Handbook of Dialogical Self Theory* (pp. 295-312). Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9781139030434.022>
- 木谷 智子・岡本 祐子 (2018). 自己の多面性とアイデンティティの関連—多面的アイデンティティに着目して—. 青年心理学研究, 29, 91-105. https://doi.org/10.20688/jsyap.29.1_91
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究, 31(4), 292-302. https://doi.org/10.5926/jjep1953.31.4_292
- Kroger, J. (2007). *Identity development: Adolescence through adulthood* (2nd ed.). Sage Publications.
- Kroger, J., Martinussen, M., & Marcia, J. E. (2010). Identity status change during adolescence and young adulthood: A meta-analysis. *Journal of Adolescence*, 33(5), 683-698. <https://doi.org/10.1016/j.adolescence.2009.11.002>
- 窪山 哲雄・本田 路子 (2024). 人的資本経営の実践に向けて—価値共創概念の拡張による新しい雇用システムの提案—. 経済論叢, 198, S71-S86.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, 42(1), 58-82. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2007.04.004>
- 正木 澄江・岡田 昌毅 (2010). キャリア初期の職場における関係性が職業的アイデンティティに及ぼす影響. 産業・組織心理学研究, 24(1), 29-42. https://doi.org/10.32222/jaiop.24.1_29
- 正木 澄江 (2021). 働くことの意味づけプロセスが個人と組織に及ぼす影響. 産業・組織心理学研究, 34(2), 101-113. https://doi.org/10.32222/jaiop.34.2_101
- 松見 淳子 (2016). エビデンスに基づく応用心理学的実践と科学者・実践家モデル—教育・研究・実践の連携—. 応用心理学研究, 41(3), 249-255. https://doi.org/10.20756/jjap.41.3_249
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3(5), 551-558. <https://doi.org/10.1037/h0023281>
- McAdams, D. P. (1985). *Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity*. Homewood, IL: Dorsey Press.
- McAdams, D. P. (1993). *The stories we live by: Personal*

- myths and the making of the self*. William Morrow.
- McAdams, D. P., & McLean, K. C. (2013). Narrative identity. *Current Directions in Psychological Science*, 22(3), 233–238. <https://doi.org/10.1177/0963721413475622>
- McAdams, D. P., & Pals, J. L. (2006). A new Big Five: Fundamental principles for an integrative science of personality. *American Psychologist*, 61(3), 204–217. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.61.3.204>
- McLean, K. C., Pasupathi, M., & Pals, J. L. (2007). Selves creating stories creating selves: Narrative self-construction in late adolescence. *Developmental Psychology*, 43(6), 1417–1431. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.43.6.1417>
- McLean, K. C., & Syed, M. (Eds.). (2015). *The Oxford handbook of identity development*. Oxford University Press.
- Meeus, W. (2011). The study of adolescent identity formation 2000–2010: A review of longitudinal research. *Journal of Research on Adolescence*, 21(1), 75–94. <https://doi.org/10.1111/j.1532-7795.2010.00716.x>
- Mellado, A., del Río, M. T., Andreucci-Annunziata, P., & Molina, M. E. (2024). Psychotherapy focusing on dialogical and narrative perspectives: A systematic review from qualitative and mixed-methods studies. *Frontiers in Psychology*, 15, 1308131. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2024.1308131>
- Monereo, C., & Badia, A. (2020). Professional identity and dialogical perspectives in education. *Quaderns de Psicologia*, 22(3), e1572. <https://doi.org/10.5565/rev/qpsicologia.1572>
- 内閣府 (2024). 令和6年版高齢社会白書.
- OECD. (2018). *The future of education and skills: Education 2030*. OECD Publishing.
- 岡本 祐子 (1999). アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリア形成. *組織科学*, 33(2), 4–13.
- Pasupathi, M. (2001). The social construction of the personal past and its implications for adult development. *Psychological Bulletin*, 127(5), 651–672. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.127.5.651>
- Phinney, J. S. (1992). The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for use with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7(2), 156–176. <https://doi.org/10.1177/074355489272003>
- Raskin, P. M. (1984). Procedures in research on identity status: Some notes on method. *Psychological Reports*, 54(3), 719–730. <https://doi.org/10.2466/pr0.1984.54.3.719>
- Rasmussen, J. E. (1964). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15(3), 815–825. <https://doi.org/10.2466/pr0.1964.15.3.815>
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10(6), 525–537. <https://doi.org/10.1007/BF02087944>
- サトウ タツヤ (2018). ナラティブの意義と可能性. 言語文化教育研究, 16, 2–11.
- Savickas, M. L., Nota, L., Rossier, J., Dauwalder, J.-P., Duarte, M. E., Guichard, J., van Vianen, A. E. M., & Hirschi, A. (2009). Life designing: A paradigm for career construction in the 21st century. *Journal of Vocational Behavior*, 75(3), 239–250. <https://doi.org/10.1016/j.jvb.2009.04.004>
- Shamir, B., & Eilam, G. (2005). “What’s your story?” A life-stories approach to authentic leadership development. *The Leadership Quarterly*, 16(3), 395–417. <https://doi.org/10.1016/j.leaqua.2005.03.005>
- Stephen, J., Fraser, E., & Marcia, J. E. (1992). Moratorium-achievement (MAMA) cycles in lifespan identity development: Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of Adolescence*, 15(3), 283–300. [https://doi.org/10.1016/0140-1971\(92\)90031-Y](https://doi.org/10.1016/0140-1971(92)90031-Y)
- Suszek, H. (2017). Critique of Dialogical Self Theory. In A. Columbus (Ed.), *Advances in Psychology Research* (Vol. 131, pp. 1–19). Nova Science Publishers.
- 谷 冬彦 (2001) アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討 (I) 神戸大学発達科学部研究紀要, 9, 31-39
- Waters, T. E. A., & Fivush, R. (2013). Relations between narrative coherence, identity, and psychological well-being. *Memory*, 21(1), 98–110. <https://doi.org/10.1080/09658211.2012.756030>
- 山崎 勝之・内田 香奈子 (2015). 調査研究における質問紙の作成過程と適用上の諸問題. 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) , 20, 1-10.